巻頭言

「メディア」がつなぐ知

まつうら　よしみつ
松浦　良充
（常任理事）

メディアセンター担当常任理事に就任して，1年以上が経過した。振り返れば慶應義塾に着任した20年前，「メディアセンター」という呼称にとても新鮮な響きを感じた。と同時に，若干の違和感も抱いた。悠久の歴史のなかで厚く深く蓄積された蔵書を前にすると，やはり「図書館」のイメージが強く迫ってくる。その後，マルチ・メディア資料，デジタル・コンテンツが飛躍的に拡充し，文字通りの「メディア」センターの恩恵に大いにあずかっている。それでも私には，まだまだ「図書館」と呼ぶことの方がしっくりくる。

学生にとってはしかし，疑いなく「メディア」である。「これからメディアに行きます」と耳にすると，せめて「センター」をつけてね，と思わず言いたくなる。もっとも「メディア」の方が，学生が親しみをもって気軽に足を運べるような気もする。メディアセンターの公式サイトには，「慶應義塾大学では図書館はメディアセンターとして親しまれています」とある（なおここでは，「慶應義塾大学図書館規程」と「慶應義塾大学メディアセンター規程」による両者の関係にはあえて踏み込まない）。それぞれの立場やニーズ，そしてイメージに応じて，呼びやすいように呼んで，大いに利用してもらえばよいのだろう。

メディアセンターには，各キャンパスとそれを統括する本部にそれぞれ所長・事務長が置かれており，強固な事務組織のもとに着実に業務が遂行されている。責任放棄をするわけではないが，担当常任理事の出る幕はなさそうにも思える。それでも本部・各キャンパスをあわせると，教育研究経費としての年間予算は20数億円にのぼり，職員規模も大きな組織である。担当常任理事の任務は，メディアセンターと，法人・経営部門や学内の他の部署・部局との間に立ち，それらの関係の「媒介」（メディア）にあるのではないかと考えるようになっている。メディアセンターの組織と業務を学内のさまざまな組織や業務とつなげていく，そのお手伝いをすることが当職の役割である。

慶應義塾の三大事業として，教育，研究，医療が挙げられるが，メディアセンターは，まさにこの三つの事業の根幹をすべてのキャンパスにわたって担っている。加えて，この三大事業は，待ったなしのグローバル化の趨勢のなかにある。それを考えると，メディアセンターは，本学の国際連携・協力にとっても欠かせない使命を負っている。さらに，これまでも貴重書展示会やデジタルコレクションの公開を行ってきているが，今後，KeMCo（慶應義塾ミュージアム・コモンズ）や福澤諭吉記念慶應義塾史展示館とも連携してアウトリーチ活動のさらなる活性化をはかることも期待されている。このように，教育，研究，医療，さらに国際連携・協力，社会貢献の各事業について，まさにメディアセンターが「メディア」となって，慶應義塾の豊富な知的資源の流通，創造・再構成，収得・保全，活用のためにエッセンシャルなはたらきを担っていることを確認したい。

このような「メディア」の捉え方は，もともとメディアセンターという呼称に託された意味とは異なっていることは承知している。ただし，もはや紙媒体なのか，デジタル資料なのか，という区分を超えて，知的資源のマネジメントを考えるときを迎えている。Society 5.0やデータ駆動型社会の到来が指摘されるなかで，データ，情報，知識の関係が大きく組み換えられようとしている。図書館資料の分類体系は，人類の知的遺産としての学問体系の壮大さを示すものとして圧倒される。しかしいまは，このディシプリンの壁を超えて，知的資源の越境やネットワーク化が求められている。その知をつなぐ「メディア」としてメディアセンターが一層の力を発揮する時が来ている。